

難民の「統合」に対する促進要因・阻害要因
—スウェーデン在住のベトナム難民の経験から—

Positive and Negative Factors Pertaining to the Integration
of Refugees

—From the Experience of Vietnamese Refugees Living in Sweden—

荻野 剛史
Takahito OGINO

I. はじめに

1. 問題の所在

2017年、19,629人の外国人が、難民としての保護を求めて難民認定申請（難民としての保護を求めて法務大臣宛、難民認定申請を行った外国人）を行っている。同年、難民との認定を受けた外国人は20名、人道的な配慮によって日本での在留が認められた人は45人である（法務省入国管理局 2018）。合計65人の難民認定申請者が、立場の違いはあるものの日本での在留を認められた。

一方難民問題は「在留が認められること」が解決ではない。「在留が認められること」はファーストステップに過ぎず、それ以降、日本での生活の再構築に向けて様々な問題が生じる。日本では難民を含む外国籍住民の生活のありようについて、従来の多文化共生に代わり、近年では統合という概念で表現されることが多い。統合の定義についてはいくつかの論が見られるものの、統合を実現させるための支援方法は管見の限り明確にはなっていない。このためまずは難民の定住経験から、統合に対する促進要因・阻害要因を明らかにすることが必要であるが、この点に関して在日難民の定住経験に関する先行研究は散見されるもの（例えば、川上 2001; 荻野 2013）、本研究の関心対象であるスウェーデン在住の難民の定住経験に関する先行研究もまた、管見の限り明らかにされていない。

2. 研究の目的

以上の背景のもと、本研究ではスウェーデン在住のベトナム難民が統合の過程で経験した、「統合」に対する促進要因・阻害要因を明らかにすることを目的とする。

調査対象としてスウェーデン在住のベトナム難民を選定したのは、スウェーデンの難民受入れ制度による。同国は2015年前後から生じている欧州難民危機を背景に難民の受入れを多少狭めている現実もあるものの、長きにわたり多数の難民や移民を受け入れており（井樋 2010: 139）、2年間に渡る言語教育などの提供を通じて、結果的に、後述する Ager らが指摘するような統合の実現に注力してきたと考えられる国の一つである。このため今後日本において難民の「統合」を進める際の、一つのモデルとして考えらえるためである。

3. キーワードの定義

「統合」は、一般に国際移住者（難民のみならず移民を含む）と、移住先の社会や地域社会とのかわりのありようを示す言葉として用いられている。但しその意味内容は論者によって異なるのが現状であり、本研究では「統合」を、荻野（2018）の定義を援用して、「難民が、平時活動する社会において周囲の人々と同等の権利義務を有し、かつスウェーデンでの生活にあたって必須な有形無形の要素を取得した上で、周囲の人々と交流しながら生活できる状態、及びこのような生活の過程」と捉える。ただしこの定義では、統合の要素について権利や生活にあたって必須な有形無形の要素、などと具体的には述べられていないため、「統合」に必要な個々の要素群については、Ager and Strang（2008）の指摘を援用することとする。

Ager らは、統合（Integration）を構成する要素として、次の4分野に分類された11の領域を挙げている。

Markers and Means（手段）分野：Employment（雇用）、Housing（住居）、Education（教育）、Health（医療保険）

Social Connection（社会的結束）分野：Social Bridges（社会的連帯）、Social Bonds（社会的結束）、Social Links（社会的連携）

Facilitators（統合の促進要因）分野：Language and Cultural Knowledge（言語と文化の相互理解）及び Safety and Stability（安全・安心感）

Foundation（統合基盤）分野：Rights and Citizenship（権利と義務）

（Ager and Strang 2008: 169-84）¹⁾

またスウェーデン在住のベトナム難民とは、1975年に終結を迎えたベトナム戦争やその結果生じた南北ベトナム国の統一及び社会主義国化を背景として、南北ベトナム国から生じた難民のうち、本研究で実施した調査時点でスウェーデンに在住している者を指す。なおベトナム難民は、主にボート（ランド、エア）ピープル及び呼び寄せ家族に大別される。前者は、海路（陸路、空路）でベトナムを脱出した人々を指し、後者は先にベトナムを脱出した家族から呼び寄せられた人々を指す。本研究では両者（ボートピープル及び呼び寄せ家族）をスウェーデン在住のベトナム難民（以降、「ベトナム

ム難民」と表記)とする。

II. 調査・分析

1. 調査・分析の方法

本研究では、前述の目的のため、「ベトナム難民」6名に対し、インタビュー調査（調査）を行った。調査は2017年2月25日と2018年3月17日に、インタビュー協力者（調査協力者）の指定した場所または筆者の宿泊先施設（共用部分）で行った（調査協力者の都合により、1件は電話での調査となった：D氏）。

本研究では「ベトナム難民」と社会との接触に関心事としている。このためスウェーデン到達時点で15歳（生産年齢）以上の「ベトナム難民」を調査協力者とした。通訳兼現地コーディネーター（以下、通訳者）に調査の目的を伝え、在スウェーデンベトナム人団体等に連絡頂き、協力を求めて頂いた。その結果、次の6名の調査協力者が選出された（表1）。

表1 調査協力者の属性

	性別	ベトナム出国年 / 当時の年齢	ベトナム出国経緯	備考
A氏	男性	1979年 / 20歳	ボート→難民キャンプ→スウェーデン	D氏は 電話面接
B氏	女性	1991年 / 41歳	家族呼び寄せ	
C氏	男性	1985年 / 18歳	家族呼び寄せ	
D氏	女性	1993年 / 20歳	家族呼び寄せ	
E氏	男性	1988年 / 15歳	家族呼び寄せ	
F氏	女性	1997年 / 24歳	家族呼び寄せ	

6名中3名が男性、3名が女性である。またベトナム出国当時の年齢は15歳から41歳、出国年は最も古いA氏が1979年にベトナムを出国、最も新しいF氏は1997年の出国である。またA氏はいわゆるボートピープルで、A氏以外は家族に呼び寄せによってスウェーデンに到達した。なおD氏のみ、D氏の都合により電話を介した調査となった。

調査は通訳者を介してスウェーデン語で行い、会話の内容はICレコーダで録音した。主な聴取内容はスウェーデン到達後における生活史であり、特に前述のAgerらが指摘する統合（Integration）に関する経験を聴取した。調査後、調査で得たデータは筆者自身が逐語録を作成し、調査上の誤解（言い間違いや誤解など）を防ぎ、調査協力者に訂正の機会を提供するため、調査者が作成した聴取内容のサマリーを、通訳者をつうじて送付し、確認及び訂正を依頼した（調査協力者6人のうち5人からの返送を得た）。

その後、調査協力者が経験した統合に関する事象や、統合に影響を与えたと考えられる発言部分（促進要因・阻害要因・その他）を抽出し、意味内容の近さの点からいくつかの発言をまとめて概念化した。そして前述のAgerらが指摘する統合に含まれる4分野を踏まえて、生成した概念をカテゴ

ライズした。

2. 倫理上の配慮

調査協力者に対して、調査で得たデータは研究用途以外では用いないこと、人や場所が特定できる形での公表はしないことを説明し、書面（D氏については口頭）での同意を得た。併せて東洋大学大学院の研究等倫理委員会の承認を得た上で実施した。

Ⅲ. 分析結果

上記の手続きを行った結果、20の概念から成る6つのカテゴリーが生成された。以下、カテゴリーごとに含まれる概念及びその定義、具体例を述べる。なおこれ以降、【 】はカテゴリーを、〔 〕は概念を表す。また具体例中の（ ）は、調査者による問いかけまたは補足、下線部は定義の根拠となる発言部分である。語尾の記号は、発言者を示す（表1に対応）。また調査協力者の特定を防ぐため、具体例の一部を改変している。

1. 【住環境】カテゴリー

まず、住宅や住居用の家具など、住環境の獲得に関する【住環境】カテゴリーの構成要素を確認する（表2）。

表2 【住環境】カテゴリーの構成要素

概念名1	仕組みを活用した住環境の確保
定義	社会サービスなど、すでに存在している仕組みを用いて住環境を確保すること。
具体例	<u>アパートに移るとき、決まったときですね、職安からスタッフが来てですね、「住宅が決まったという連絡がありました」と、「では家具を用意しましょう」ということで、これは、難民の人たちがここで生活をスタートさせるための最初のパッケージとしてですね、家具とかは調達するのですね。無料で用意してあげるという一環で、彼らが来たわけです。</u> 〈A氏〉
概念名2	私的なつながりによる住居の確保
定義	家族や知人など、私的なつながりによって住居を確保すること。
具体例	<u>学校のある教諭、スウェーデン人の男性が、自分で持っているアパート、小さめのアパート、ワンルームのそれを貸し出したいという話を聞きつけて、それを借りることになりました。</u> 残りの大学生活はそこで。自分のアパート。〈E氏〉
概念名3	生活向上を目指した転居の実現
定義	生活の質をより向上させるために転居すること。
具体例	<u>最初のアパートは、あまり空気がない中で選んだので、仕事、職場まで距離があったのですね。もうちょっと近いところで、ということに移りました。</u> 〈A氏〉

【住環境】カテゴリーは、〔仕組みを活用した住環境の確保〕〔私的なつながりによる住居の確保〕

〔生活向上を目指した転居の実現〕の3概念から構成される。それぞれ、「社会サービスなど、すでに存在している仕組みを用いて住環境を確保すること。」「家族や知人など、私的なつながりによって住居を確保すること。」「生活の質をより向上させるために転居すること。」を意味する。

2. 【就職・就労】カテゴリー

次に、【就職・就労】カテゴリーの構成要素を確認する（表3）。

表3 【就職・就労】カテゴリーの構成要素

概念名4	応募による職の獲得
定義	公募に応募する形で、職を獲得すること。
具体例	<u>（比較的簡単に見つけれられて、すぐに雇ってもらったのですか。）これは職安で見つけた仕事でしたね。比較的簡単に、容易にこの仕事には就けました。</u> 〈B氏〉
概念名5	就職しやすい環境の存在
定義	自分にとって就職しやすい環境が存在していたこと。
具体例	<u>学校を卒業して、すぐに仕事が見つかりました。今よりも仕事が見つかりやすかったので。人手不足で、特にこの職種は人手不足で、すぐに見つかりました。</u> 〈C氏〉
概念名6	就業継続のための努力
定義	就業を継続するために努力をすること。
具体例	<u>いろいろな人がいるので、親切に教えてくれる人も、そうではない人もいるので、次からは、親切ではない人には、私は次からは聞かないことにしました。教えてくれそうな、親切な人に（教えてもらいました）。いろいろいるので、その辺は人を選んで。</u> 〈B氏〉
概念名7	働きやすい就労環境の獲得
定義	自分にとって働きやすい就労環境を獲得すること
具体例	<u>（安全の説明、スウェーデン語はご理解できましたか。）とてもはっきりと、ゆっくりしゃべってくれたので、私は理解できました。動画も見せてくれました。安全に関する。</u> 〈A氏〉
概念名8	就業への阻害要因の存在
定義	就業に対して阻害となった要因が存在していること。
具体例	<u>（社長が移民に対して差別的な扱いを取っていたので）5年で辞める気持ちは割と強かった。本当は5年経つ以前で辞めたかった。いっそのこと僕をクビにしてくださいと自分からお願ひしたのですって。だけれども社長も他の人もクビにしなかったのは、その担当を任せるのは彼以外に他にいなかったのですとずっと引き留めていた。でも辞めたかった。最終的には組合の代表も巻き込んで、結局最後5年たって辞めることができた。</u> 〈E氏〉

以上のとおり、本カテゴリーは〔応募による職の獲得〕〔就職しやすい環境の存在〕〔就業継続のための努力〕〔働きやすい就労環境の獲得〕〔就業への阻害要因の存在〕から構成される。それぞれ、公募に応募する形で職を獲得すること、自分にとって就職しやすい環境が存在していたこと、就業を継続するために努力をすること、自分にとって働きやすい就労環境を獲得すること、就業に対して阻害となった要因が存在していることを意味する。

〔就業への阻害要因の存在〕以外の要因は就職・就労を促進させる効果があるものの、〔就業への阻

害要因の存在]は調査協力者が希望する就労に対する阻害要因〔「具体例」のケースは、転職を希望していたにも関わらず、社長などによる引止めによって実現できなかったもの〕となっている。

3. 【就学・学習】 カテゴリー

次に、【就学・学習】 カテゴリーである (表4)。

表4 【就学・学習】 カテゴリーの構成要素

概念名9	体系的な就学・学習システムでの就学
定義	就学支援の仕組みを含む、スウェーデンの体系的な就学・学習システムのもと、就学すること。
具体例	成人向け教育、コンボックスというところに通って、例えば英語だとか基本的な科目を勉強しなおして、その後の進学をできるようにするために、成績を得るために、学校に通いました。〈D氏〉
概念名10	自発的なスウェーデン文化の学習
定義	自発的に、スウェーデン文化 (生活様式) を学習すること。
具体例	例えばほかの人が自転車に乗っている姿を見て、道路を走るのではなく、自転車専用道路を走るのでとか、そういうことを自分で学んできましたし、誰かに聞けば必ずみなさん優しく教えてくれました。〈A氏〉
概念名11	就学継続に向けた自力による家計のやりくり
定義	制度などではなく、就学継続に必要な金銭を自力で取得すること
具体例	アルバイトと勉強で生計を立て、親に負担がないようにしました。そこでいろいろアルバイトをしながら、自分で工夫したことは、例えばバーゲンで洋服を安く買って、それで学校で友達に「買いたい？」と聞いて売ったり、あとベトナムの料理が好きなので、お弁当をみんなの分を作ってその分のお金を払ってもらったりとか、いろいろと努力したのですよ。〈E氏〉
概念名12	金銭的な理由による統合の挫折
定義	金銭的な理由で、統合実現の一部を挫折すること。
具体例	一つ後悔する部分としては、悔やまれることとしては、さらに大学の勉強を続けて修士課程とかそういったことを取れたら本当はよかった。だけど金銭的な部分で邪魔をした。〈E氏〉

本カテゴリーは、〔体系的な就学・学習システムでの就学〕〔自発的なスウェーデン文化の学習〕〔就学継続に向けた自力による家計のやりくり〕〔金銭的な理由による統合の挫折〕から構成され、それぞれの定義は上記のとおりである。〔金銭的な理由による統合の挫折〕は、他の概念とは異なり就学・学習に対する阻害要因となっている。

4. 【言語サポート】 カテゴリー

次は、【言語サポート】 カテゴリーである。このカテゴリーは、〔制度的な言語サポートの利用〕のみから構成される (表5)。

表5 【言語サポート】 カテゴリー

概念名13	制度的な言語サポートの利用
定義	制度化されている言語サポートを利用すること。
具体例	コミュニティでも、 <u>通訳が必要と申し出れば、それも手配してくれるというサービスもありました。</u> (A氏)

〔制度的な言語サポートの利用〕は、具体例にある「コミュニティでも、通訳が必要と申し出れば、それも手配してくれるというサービスもありました。」のように、自治体などによって制度化されている言語サポートを利用することを意味する。

5. 【後押し】 カテゴリー

これまでの4 カテゴリーは、「統合」に必要な要素に直接的に関係するものだが、本カテゴリーは、これらの要素の促進を後押ししていると考えられる要素から構成される（表6）。

表6 【後押し】 カテゴリー

概念名14	インフォーマルな支援者の獲得
定義	インフォーマルな形によって、手助けや支援してくれる人を獲得すること
具体例	<u>大学側で私とあるスウェーデン人、男性ですね、と引き合わせてくれたのですけど、その方は非常に様々な面で助けてくださって、経済的なこともそうですけど、生活面で困ったことがあったら何でも相談に乗ってもらって、彼の存在はとても大きかったです。</u> (E氏)
概念名15	よりよい統合実現に向けた戦略的行動
定義	より良い統合の実現のため、戦略的に行動すること。
具体例	<u>(大学での専門をITに変えようと思ったのはどうしてですか) 当時ITの仕事が人気があったのと、将来のことを考えるとITの勉強をしたほうが仕事があるだろうと考えて選びました。</u> (D氏)
概念名16	なじめると思える感覚の獲得
定義	ここでやっていける、なじんで生活できる、と思える感覚を取得すること。
具体例	<u>私も快く迎えられているという気持ちがあって、じゃあ自分も頑張らなきゃ、という気持ちになりました。</u> (E氏)
概念名17	家族の力を活用した問題解決
定義	家族の力を活用し、生活上の諸問題を解決すること
具体例	<u>私と弟は(家庭内で)「男だから」ということで進学をして。という考えが(家庭内に)あったので、行かせてもらいました。</u> (E氏)
概念名18	サービスに関する情報の取得
定義	各種のサービス利用につながる情報を取得すること。
具体例	<u>その都度相談する相手を。特定の誰かではなかったです。自分で調べて、例えば奨学金とかもですね、申請する方法を覚えてもらう。そういった情報を持っている正しい人に聞くのが大事だと<u>言っているんですけど。いろいろ、試行錯誤で彼女も聞いてきたのですけど。</u>(F氏)</u>

〔インフォーマルな支援者の獲得〕〔よりよい統合実現に向けた戦略的行動〕〔なじめると思える感

覚の獲得] [家族の力を活用した問題解決] [サービスに関する情報の取得] から構成され、それぞれの定義は上記のとおりである。[インフォーマルな支援者の獲得] [家族の力を活用した問題解決] [サービスに関する情報の取得] は他者からのサポート活用を意味している。一方 [よりよい統合実現に向けた戦略的行動] [なじめると思える感覚の獲得] は、「ベトナム難民」自身の積極的な行動や、心持ちについて言及されている。

6. 【立ち止まり】 カテゴリー

最後に、【立ち止まり】 カテゴリーは、「ベトナム難民」が統合の過程を進む中で、一旦立ち止まることを意味する (表7)。

表7 【立ち止まり】 カテゴリー

概念名19	疎外感の取得
定義	日常生活において、疎外感を感じること。
具体例	新しい文化にされて、学校ではやはりクラスメイトたちがやっている普通の生活と違いがあって、疎外感を感じましたね。スウェーデンの文化に自分は入り込めていない。(E氏)
概念名20	一時休止
定義	統合を目指しつつも、一度立ち止まること。
具体例	高校を出た後に進学も考えたのですが、努力ばかりで、ずっと頑張っていて、結構学校に疲れちゃって (略) そこで、学校の進路の、進学のカウンセラーに相談したんですって。(略) 返ってきた答えが「だったら1-2年働いてから進学をすれば?成績は立派な成績があるし、これは2年後も使えるから全然問題ない」ということで、2年間いろいろなアルバイトをしました。いろいろな職種を経験して。例えば介護の仕事もしましたし、公園とか街の外観を整備するような仕事もしましたし、草むしりじゃないですけど花壇の整備とかいろいろな仕事をしました。(E氏)

本カテゴリーは、[疎外感の取得] と [一時休止] からなる。前者は自分とは異なる文化が主流となっている集団 (学校) に通うなかで、自文化の差を感じ、あらたな文化に入り込めていない状況を表している。一方後者は、高校卒業後すぐに大学に入学するのではなく、一旦立ち止まって、将来の自分のありようを再考している姿を現している。

IV. 考察

以上、各概念・カテゴリーについて検討した。ここでは次の2点について考察する。

1. 各カテゴリーにおける「統合」の促進要因

まず、Agerらの指摘する統合の諸要素に直接関係する各カテゴリー (【住環境】【就職・就労】【就学・学習】【言語サポート】) における「統合」実現のために必要な肯定的要因を検討する。調査対象

者の発言から、以下の諸概念が「統合」に対する促進要因と考えられる。

- ・ 【住環境】：〔仕組みを活用した住環境の確保〕 〔私的なつながりによる住居の確保〕
- ・ 【就職・就労】：〔応募による職の獲得〕 〔就職しやすい環境の存在〕 〔就業継続のための努力〕 〔働きやすい就労環境の獲得〕
- ・ 【就学・学習】：〔体系的な就学・学習システムでの就学〕 〔自発的なスウェーデン文化の学習〕
〔就業継続に向けた自力による家計のやりくり〕
- ・ 【言語サポート】：〔制度的な言語サポートの利用〕

このうち下線（実線）が付された要因は、支援的な要素（調査協力者が受けた支援）、特にフォーマルサポートの活用が含まれる概念であり、【住環境】【就職・就労】【就学・学習】【言語サポート】いずれにも含まれている。また下線（点線）が付された要因は、インフォーマルサポートの活用が含まれている概念であり、【住環境】【就職・就労】カテゴリーにのみ確認されている。

以上の点から Ager らが指摘する統合の要素のうち、主に Markers and Means（手段と方法）領域の促進を進めるには、フォーマルサポートが存在し、それを活用すること・活用できることが必須である。一方インフォーマルサービスは一部のカテゴリーでのみ確認できる。しかしこれは他のカテゴリーにおいてインフォーマルサービスが不要であることを示すものではなく、【後押し】カテゴリーで明らかにされているとおり、インフォーマルサポートが「ベトナム難民」の生活全般において機能している。

以上の点から各カテゴリーにおける「統合」の実現に対し、フォーマルサービス・インフォーマルサービスの働きが寄与していると指摘できる。

2. 「統合」に対する否定的要因

次に「統合」に対する否定的要因について検討しよう。わずかではあるものの、【就学・学習】カテゴリーにおける〔金銭的な理由による統合の挫折〕と、【就職・就労】カテゴリー〔就業への阻害要因の存在〕の2つが、「統合」に対する否定的要因として挙げられる。原因として、フォーマルサービスが行き届かなかった部分と考えられる。

V. 結語

以上、本研究では「ベトナム難民」のスウェーデンでの統合における促進要因・阻害要因を検討した。最後に本研究の課題を述べる。本研究の調査協力者は少数であることから、本結果は「ベトナム難民」の全体像を表したのではなく、今後より広範な調査が必要である。

前述のとおり、難民としての保護を求めて来日する外国人が近年、来日している。割合としては非常に少数ではあるものの、このうちの一部の人々が、その後も日本で生活することになる。その際は、【立ち止まり】の存在を踏まえつつ、「統合」を目指した支援が必要となってくるものの、本研究で取り上げたスウェーデンの例によれば、Agerらが指摘する統合の構成要素に対して、フォーマルサポートとインフォーマルサポートの提供が必要であると指摘できる。日本においても、滞日難民に対してフォーマルとインフォーマル両方のサポートが提供されている（荻野 2006; 2011）。しかし一般に、フォーマルサポートの不十分さが特に指摘される。フォーマル・インフォーマルサポートそれぞれの役割分担を考え、その役割を満たすためのサポート体制の構築が必要である。この体制を構築するためには、日本で生活している難民が日常生活で経験している生活のしづらさの全体像を明らかにし、誰が、どのような方法で生活のしづらさ縮減のための支援を提供しうるのか、この点に関する研究を進めることが必要である。

付記

調査協力者及び、本研究の調査のコーディネートを行ってくださった通訳者に、心よりお礼申し上げます。また本研究はJSPS 科研費16K04190の助成を受けたものです。

注

1) 用語の日本語訳は、(滝澤 2017)を参考にした。

文献

- Ager, Alastair and Strang, Alison (2008) Understanding Integration: A Conceptual Framework *Journal of Refugee Studies*, 21(2), 166-91.
- 法務省入国管理局 (2018) 「平成29年における難民認定者数等について」
(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00600.html, 2018.11.28).
- 井樋三枝子 (2010) 「スウェーデンの外国人政策と立法動向」『外国の立法』246, 139-151.
- 川上郁雄 (2001) 『越境する家族－在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店.
- 荻野剛史 (2006) 「わが国における難民受入れと公的支援の変遷」『社会福祉学』46(3), 3-15.
- 荻野剛史 (2011) 「インドシナ難民の生活問題解消に向けた地域支援者によるサポートの特性」『社会福祉学』55(1), 100-12.
- 荻野剛史 (2013) 『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス』明石書店.
- 荻野剛史 (2018) 「難民問題における統合概念の検討」『東洋大学社会学部紀要』55(2), 67-75.
- 滝澤三郎 (2017) 「インドシナ難民の定住・社会統合状況」滝澤三郎編著『難民を知るための基礎知識—政治と人権の葛藤を越えて』明石書店, 295-302.

【Abstract】

Positive and Negative Factors Pertaining to the Integration of Refugees —From the Experience of Vietnamese Refugees Living in Sweden—

Takahito OGINO

This research seeks to clarify positive and negative factors pertaining to the integration process for Vietnamese refugees living in Sweden (“Vietnamese refugees”). With this objective in mind, interviews were carried out with six Vietnamese refugees consisting mainly of questions on their lives in Sweden.

The interview results were analyzed qualitatively, identifying twenty concepts that can be classified into six categories. Ten of them were positive factors, while two were negative factors. Results indicated that the need to clarify an overall picture of the difficulties experienced by refugees and identify who could provide support was critical. The information is useful to refugees in Japan.